

目次

開催にあたって	3
目次・凡例	4
本編	
第一章 井伊直弼と幕末の動乱	5
黒船来航	7
吉田松陰出国事件	16
相州警衛	17
開国	20
江戸の混乱	22
安政の大獄	23
桜田門外の変	27
長州征討	35
戊辰戦争	42
第二章 最後の代官大場信愛	43
世田谷の農兵隊	45
維新後の信愛	48
第三章 斎藤寛斎と山本織之助	51
斎藤寛斎と太子堂郷学所	52
山本織之助と石橋楼	60
第四章 豪徳寺と松陰神社	67
豪徳寺	68
松陰神社	86
附編	
〈論文〉 彦根藩の海防と世田谷領	98
清水詩織	

〈論文〉 長州藩御抱屋敷から松陰神社へ 松本剣志郎	116
〈訓読および注釈〉	
「開国始末」序跋および豪徳寺碑文 重野宏一	135
主要参考文献	160
出品目録	163
謝辞	167

凡例

- 一 この図録は、世田谷区立郷土資料館が開催する特別展「幕末維新―近代世田谷の夜明け―」（会期 平成二十四年十一月三日～十二月二日）の展示図録である。
- 一 本展示の企画および本図録の編集は、当館学芸員・武田庸二郎、当館歴史専門調査員・小林信夫、同・上原智、当館解説員・清水詩織、一橋大学大学院生・井上直子が担当した。
- 一 本編解説は武田が担当した。
- 一 カラー図版の写真撮影は小林、上原、井上が担当したが、「金海奇観」（10頁～16頁）、「エンフィールド銃」（36頁）、「大熊氏廣作 吉田松陰像」（87頁）、「若林御抱地田畑図面」（88頁）および「松陰先生改装日之写真」（92頁）については、それぞれ、早稲田大学図書館、板橋区立郷土資料館、松陰神社、山口県文書館から提供を受けた。

第一章 井伊直弼と幕末の動乱





1 世田谷区指定有形文化財  
井伊直安筆  
井伊直弼肖像（油絵）  
明治中期  
豪徳寺蔵

本作品の作者井伊直安は直弼の三男で、文久二年、越後与板藩々主井伊直充の養子となり、同年、その家督を継いだ。また、和洋両様の絵を能くし、特に、油絵の技法は、越後長岡出身の洋画家・小山正太郎に師事して巧みであった。父に対する敬慕の念が強く、直弼が眠る豪徳寺に埋蔵されることを生前より望んだため、同寺に墓が造られた。

2 島田三郎著『開国始末』所収  
直弼彦根ノ埋木乃舎三閑居スルノ図  
（野口小嶺画）  
明治二十一年刊  
当館蔵



井伊直弼は、十一代彦根藩主・井伊直中の第十四子として、文化十二年（二八一五）、彦根城に生まれた。幼名を鉄之助という。十七歳の時、亡父の跡を継いで藩主となった長兄・直亮から三百俵を与えられ、城外の北の屋敷（埋木舎）に部屋住みとして閑居することとなった。しかし、弘化三年（一八四六）二月、仲兄・直元が病死し、これに替わって直亮の世子となった。そして、その四年後の嘉永三年（一八五〇）十一月二十一日には十三代彦根藩主となり、歴史の表舞台へ引きずり出されることとなったのである。

## 黒船来航

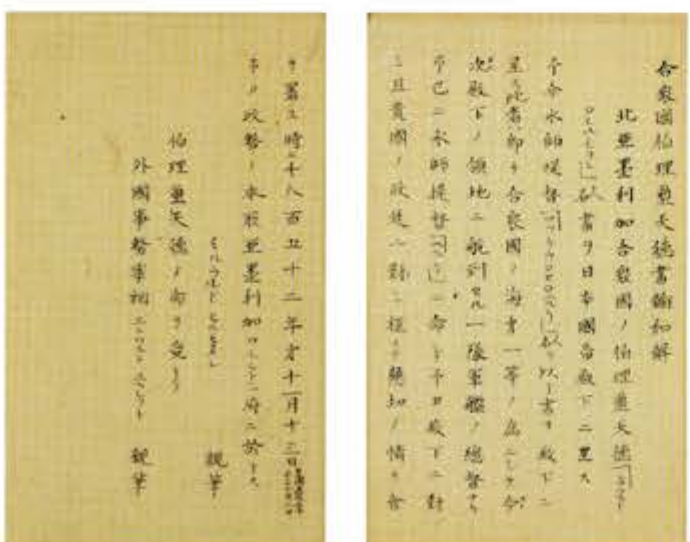
嘉永六年（二八五三）六月七日の夜、この月初めに国許へ還ったばかりの直弼の許に「黒船来航」の報せが舞い込んだ。米国使節ペリーが大統領フィルモアの国書を携え浦賀に来航、開国を迫ったのである。しかし、七月二十四日、幕府からの出府命令に応じて直弼が江戸に到着した時、既にペリーは即答を得ることが困難であると判断して江戸湾を退去していた。

嘉永七年（二八五四）正月、ペリーが再び来航し、その年の三月三日には日米和親条約が調印された。その主な内容は、下田・函館の開港、両港における遊歩区域の設定、最惠国待遇の承認、外交官の下田駐在許可であった。それに基づき、同三年七月、総領事ハリスが日本駐在を開始し、かねて念願であった日米修好通商条約の締結を幕府に迫った。



3 サスケハナ号模型（縮尺1/80）  
当館蔵

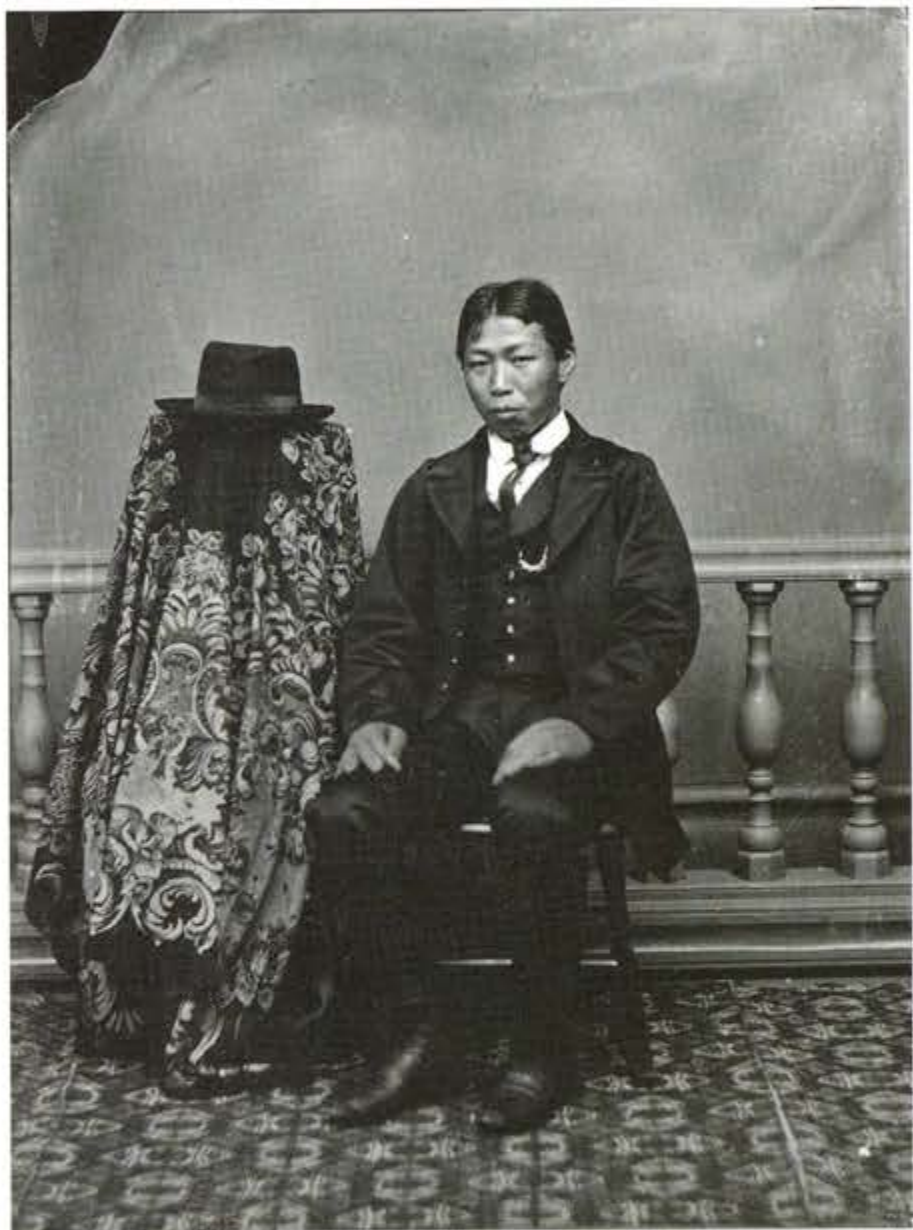
蒸気フリゲート艦。一五八〇年製造。排水量二四五〇トン。全長二五七フィート。嘉永六年来航時の旗艦。ペリーが乗船していた。



4 合衆国伯理爾天徳書翰及副翰和解（写本）  
嘉永六年  
寄託品

アメリカ合衆国大統領フィルモアの親書の和訳本。この本は巻に流布し、多くの写本が作られた。本書は大場代官家の所蔵本。





50  
大場信愛肖像写真  
明治五年撮影  
寄託品

本写真は、明治五年（一八七二）三月十六日に撮影されたものである。この年の前年七月に廃藩置県が断行され、さらに同年十一月には、旧彦根藩領のうち、佐原郡の村々が東京府に、多摩郡の村々が神奈川県に移管されたこととなった。当時、大場信愛はその所管の事務処理に従事していた。「大場美佐の日記」明治五年三月十四日の条には、「早朝題「丁江出張ス」とある。「題丁」というのは、彦根藩統治時代から郷宿（非公事宿）として信愛が利用していた宿屋・上総屋のことである。大場家に遺る上総屋の領収書によれば、この時、信愛は十四日から十九日までこの宿に五泊している。ここから、常盤橋近くにあった長浜県（旧彦根藩）庁に通って庶務を執っていたのである。肖像写真を撮影した十六日

も出張中の多忙な身であったが、こうした職務の間を縫って写真館での撮影を行ったのである。この写真を撮影した写真館が何処なのかについては残念ながら、今のところ特定できていない。しかし、長浜県庁のあった常盤橋界隈からほど近いところ（神田淡路町）に在った三井逸郎の写真館などはその最有力候補であろう。洋装に身を固めた若き日の信愛の姿からは、新しい文物を抵抗なく享受できる柔軟な思考力の持ち主という一面と、勤勉実直な能吏としての一面を持ち合わせた彼の人となりを感じることができよう。

彦根藩世田谷領の最後の代官・大場信愛は、弘化三年（一八四六）二月五日、佐原郡中延村の豪農鎌木善兵衛秀胤の次男に生まれた。通称を弘之介という（のち弘に改む）。慶応元年（一八六五）八月十六日、実姉・美佐の嫁ぎ先である大場家の養子となったが、その僅か二日後、美佐の夫で時の代官であった大場豊福与一が逝去し、大場家第十三代の当主となった。また、同月二十七日には彦根藩世田谷領の代官見習、同年十二月十四日には、代官本役となった。弱冠二十歳であった。

## 世田谷の農兵隊

攘夷運動によって諸外国との衝突が度重なること、幕府は有事に備え、警備体制の強化を計る必要に迫られた。文久三年（一八六三）八月には、品川御殿山に台場を築き、さらに翌四年には、江戸周辺の警備体制の手薄さを補う必要上から、兼て葦山代官・江川太郎左衛門英龍から進言のあった農兵の取り立てを実施した。また、同年十二月、將軍家茂の上洛に当っては、江戸の警備強化を目的として、江戸市中の出入口に関門を設置した。

翌年（元治元年・一八六四）になると、農兵隊を組織しようとする動きは、世田谷にも及んだ。この年七月二十三日、幕府は、それまで和泉弾薬庫の警備に当たっていた十二ヶ村（内八ヶ村は世田谷幕府領）の農民に対して、銃隊稽古の開始を通達した。

また、彦根藩世田谷領においても、それに先立つこと二十日程の同年七月四日、農兵隊が組織された。この日、上町から瀬田まで砲術稽古人の従軍演習がおこなわれている。この農兵隊を構成していたのは、村役人と永上人（井伊家に献金することによって永代苗字御免などの特権を得た百姓）およびその子弟たちで、彼らは任務遂行のため、自分の間帯刀をも許されることとなった。

慶応元年（一八六五）十二月十五日、世田谷新宿市町見廻りの行列には、代官大場信愛の指揮の下、前年に結成されたばかりの銃隊が加わった。



51  
ゲバール銃  
十九世紀中葉  
寄託品

大場代官家の所蔵品。世田谷農兵隊で使用されたもの。



52  
彦根藩銃砲稽古人従軍隊列  
元治元年七月四日  
寄託品

元治元年七月四日、この日組織された彦根藩世田谷領の農兵隊は、上町から瀬田まで従軍演習を行なった。本史料はその際の隊列を書き上げたもの。



齋藤寛齋と太子堂郷学所

齋藤寛齋は、文政四年（一八二二）、医師鈴木玄視の子として上総国武射郡山中村に生まれた。初名を鈴木常次郎という。天保五年（一八三四）、父と死別。「人タル者己レ善事ヲ務メテ以テ他ニ善ヲ進メ、国ニ有益ヲ遺シ是以テ孝タル人ト申ナリ、返ス々モ忘レ給フ間舗」という父の遺訓に従い、善事を成さんとの大志を抱くが叶わず、神官、僧侶、儒者、髪結などの職を転々としながら、各地を流浪した。

降って天保十二年（一八四二）、二十一歳の時、武州任原郡太子堂村の大山道沿いに借家して妻りせと同所に暮らすこととなった。同十五年、一旦太子堂村を離れ、それから九年後の嘉永六年（一八五三）、以前と同じ大山道沿いの借家に舞い戻っている。太子堂村を離れていた九年間、彼らが何処で過ごしていたかについては判然としないが、同村に戻る直前には、隣り村の若林に居住していたことが、現存する人別請状の控から判明する。

太子堂村を離れた頃は、夫婦二人暮らしであったが、同村に舞い戻ったこの時、二人の間には、瀧蔵、知可松という二人の息子がいた。

その当時、常次郎一家は、彼の営む髪結業で細々と生計を立てていたが、日々の暮らしに汲々として善事を成すどころではなかった。また、学問をしたくとも、師につくことすら叶わず、独学で学ばざるを得ないという状況であった。彼の著述「夢の浮橋千代の里」には「懸る賤半髪結職を業といたし、聖賢之教を学ひ昔し

をもちり度、今日の家職に迫れ、師道も求むる事を得ず、是を悲ミ、たつきのひま二かなつきの本をよミ、織か和漢の書二身ヲよせ、独学孤陋而」とある。

しかし、文久元年（一八六一）、そうした境遇を嘆いて暮らしていた常次郎にも転機が訪れる。すなわち、小島四郎武振こと相楽総三との邂逅である。相楽総三は、下総の郷士の子で、早くから勤王の志を抱く者であった。この年、相楽は資金五百両をもって信濃、上野、下野などを遊歴し、ひろく同志を募っていた。常次郎は相楽との邂逅の様子を「相楽総三ナル者拙宅江参り、面会ス、善事談判数論ニ及、亦同意ニ決シ、水魚交盟を結」とのちに記している。

慶応三年（一八六七）秋、薩摩の西郷隆盛の命により江戸芝三田の薩摩邸に浪士隊が結成された。常次郎は名前を齋藤源次郎と改め、長男瀧蔵（齋藤武雄と改名）、次男知可松（鈴木隼人と改名）とともに同隊に参加した。薩摩浪士隊には盟友の相楽がおり、彼の勧誘に応じたのであろう。この薩摩浪士隊は、偽官軍事件で有名な赤報隊一番隊の母体をなすものである。

慶応四年（明治元年・一八六八）、鳥羽伏見の戦いに勝利した薩長方は、関東に逃げた幕軍を討伐するため、山陰・東海・東山・北陸の諸道に、鎮撫総督を任命した。赤報隊（のち嚮導隊）は各地の状況探索と勤王誘引を任務とした官軍先鋒隊で、姉小路俊実・滋野井公寿を擁立して三隊編成をとった。そのうち相楽総三率いる一番隊は、薩摩浪士隊以来の同志で構成されていた。相楽は独自の関東攻略策を建白し、旧幕府領の年貢半減が採用され、その布告を許された。こうして年貢半減をスローガンに慶応四年正月



61 齋藤寛齋家族写真  
明治期撮影  
寄託品



62 齋藤寛齋著  
夢の浮橋千代の里  
安政三年  
寄託品



63 宗門人別改帳  
天保十二年三月  
寄託品

百姓鉄五郎店借  
常次郎  
丑二十一日  
同八女房  
りせ  
同二十三才  
男老入  
女老入  
右男女武人日蓮宗二而拙寺旦那二粉無御座候、  
甲州身延山末  
武州任原郡余村  
日蓮宗 常円寺印



64 人別請状  
嘉永五年  
寄託品

覚  
一常次郎外三人人別送り状  
志通  
右之通り鐵五郎受取申候、以上、  
太子堂村  
名主  
子七月廿四日  
若林村  
御名主  
政五郎様  
忠左衛門 印



# 豪徳寺

豪徳寺は曹洞宗（創建当初は臨済宗）の古刹で、山号を大鈴山という。元は文明十二年（一四八〇）に世田谷城主吉良政忠が叔母弘徳院のために創建した小庵であったと伝えられる。開山は臨済宗の僧・馬堂昌譽で、創建当初の寺号を弘徳院と称した。

天正十二年（一五八四）、曹洞宗の僧侶・門庵宗関が弘徳院の住職に就き、この時、臨済宗から曹洞宗に改宗された。

降って寛永十年（一六三三）、世田谷領村々十五ヶ村が江戸屋敷附料として彦根藩に与えられ、弘徳院が同藩々主井伊家の菩提寺に取り立てられることとなった。藩主・井伊直孝の没後、その女・掃雲院によって伽藍の整備が進められ、井伊家の菩提寺に相応しい大寺に生まれ変わった。この時、寺号も直孝の法名「久昌院豪徳天英居士」に因んで「豪徳寺」と改められたと伝えられる。

境内西側の一角を占める井伊家の墓所には、井伊直孝をはじめとして、江戸藩邸で亡くなった藩主やその家族の墓がある。また、桜田門外の変で命を落とした井伊直弼の墓および殉死者八名の霊を祀った「桜田殉難八士之碑」や、主君直弼の墓守としてその後半生を捧げた忠臣・遠城謙道の墓などもある。

井伊家墓所に隣接する墓域には、幕末維新に活躍した彦根藩の家老で著名な漢詩人であった岡本黄石の墓、やはり元彦根藩士で「明治の三筆」「書聖」などと称せられた書家・日下部鳴鶴の墓などがある。また、その鳴鶴の手になる石碑四基（鳴鶴日下部先生碑銘・遠城謙道師遺蹟碑・忠正公神道碑・憲首塚碑文）もあり、幕末維新の逸事を伝える。尚、これらの碑文については本冊子所収の重野宏一「『開国始末』序跋および豪徳寺碑文」を参照されたい。



国指定史跡  
井伊家墓所



豪徳寺山門



豪徳寺仏殿（山門より望む）



井伊直弼墓

平成二十一年から二十二年にかけて井伊直弼墓ほか三基の墓の改修工事が行われた。この工事に伴う調査の結果、直弼の墓には石室・石標がないことが判明した。

一部新聞紙上（読売新聞平成二十四年六月一日朝刊）で、直弼の遺骸が豪徳寺の墓に埋葬されていないかのようによい発表されたが、「国指定史跡彦根藩主井伊家墓所 豪徳寺井伊家墓所調査報告書「保存・整備編」」（平成二十四年三月／世田谷区教育委員会）に収録されている「豪徳寺井伊直弼墓所地中レーダー探査報告」（東京工業大学 亀井研究室）は、深さ「2・2m付近から確認できる反応が埋葬主体である可能性が高い」とし、「○・八メートル四方程度の埋葬主体の存在を示唆している」。